

Fact Sheet

後藤 真理子

—— 建築からまちへ ①



つくり手と使い手

以前、某建築部品メーカーの社長さんとの対談で次のような質問を受けたことがある。「これまでほとんどのものは男性が手がけて、使うのは女性だったと思うんですが」との前置きではじまり、つくり手であり使い手である、その両方の立場にいる私からみてどんな感想があるか、という質問だった。1989年、今から20年以上前のことである。その問いかけに対し私はとっさにうまく答えることができなかった。しかしこれがきっかけとなり、それからつくり手と使い手の立場について考えるようになった。

私は建築設計やインテリアデザインの仕事をしている時はつくり手であり、生活者にもどる

と使い手になる。2つの立場を行ったり来たり、それぞれの関係をどうとらえればよいのだろうか。

建築と建物のちがい

ここで建築(けんちく)と建物(たてもの)に関わる基本的なことについて少し触れておきたい。

建築の設計や監理に携わる仕事を職業とする人を建築家(けんちくか)と呼んでいる。建築家は法律上のことばではないので建築設計の素養があれば、ある意味では誰でも名乗ることができるといえる。実際に資格を持って仕事ができる人は建築士と呼ぶ。

建築ということばと似たことばに建物があるが、建物家(たてものか)とは言わない。では建築と建物とはどうちがうのだろうか。建築とはarchitecture(アーキテクチャー)の訳語で美的文化的価値に注目した時に使われ、建物はbuilding(ビルディング)の訳語、美しさや用途よりも構造物としての特徴を表す時に使われる、と建築用語辞典には書かれている。厳密ではないが専門家はその時々で適当な使い分けをしている。

建築系の教育では、プロポーションやバランスなど見た目の美しさに関するデザインの理論を通して形態の美的価値を、また建築の歴史を通してその文化的価値を学ぶ。一方、構造や材料など建物そのものの特徴を考える分野である工学的技術的知識についても学ぶ。このように日本の建築教育現場では基本的に美的文化的価値と工学的技術的知識の2つを合わせていることになる。さらに専門に進むとそれぞれのコースによって重点の置き方は分かれるが、基本としては建築と建物という2つが平行して教育が行われているといえよう。

(裏面に続く)

Fact Sheet

後藤真理子

——建築からまちへ①

パリの仕事さがしとローマの生活

私は、今述べたような教育を受けて大学の建築学科を卒業した。卒業後もそのまま研究室に残り住宅設計に携わっていたが、3年後仕事が一段落したのを機会にフランスのパリに行くことになった。外国で設計の仕事をしたと思い、先輩を頼りにいくつかの設計事務所を訪れた。しかしオイルショック後の世界的不景気の中、思うように仕事先はみつからなかった。ヨーロッパのいくつかの都市をめぐる旅行したあと、資金も底を尽いたので2ヶ月ほどで日本に戻った。

帰国後は知合いの仕事の手伝いや専門学校の講師など、フリーの立場で過ごしていた。

1978年春、再びヨーロッパを訪れる機会に恵まれた。今度は生後間もない子供を連れて半年間、家族でイタリアのローマに住むことになった。

ローマでの生活はそれまでの日常と一変した。二千年を超す長い歴史をもち成熟した都市であるローマ、まちのなかを歩き遊歩道や公園を散歩し、市場では買物をする。毎日の生活すべてが刺激的で新鮮だった。子供連れという身軽ではないからこそ貴重な生活体験ができたのだと思う。

イタリアは古いまち並みをととても大切にする。あちこちで修復がていねいに行われ、また建築の専門家はだれからも尊敬されていた。伝統と新しい日常とが自然につながっていて、それらがあたりまえのように共存しているようにみえた。

半年間の滞在を終えて東京に戻り、住宅設計を中心に仕事を再開した。

東京で生まれ育った私は、いつしか親しみ住み慣れた東京のまちが激しく変わって行く様子に落胆し、ため息をつくようになっていた。ローマの暮らしを思い出しながら東京の生活のなにがちがうのかを考えはじめた。ローマでみた人々の暮らしや住まい、まちの様子、何が豊かだったのだろうか。ゆったり散歩できる公園、はかり売りで買える野菜、バスに乗れば子連れと見るやさっと席を譲ろうとする人たち(しかも何人もの人が)、しゃれたインテリア、などなど。数え上げればきりが無い。ローマ西南の住宅街の住まいは、室内のつくり方に無駄も少なく、収納を含めた調度などがうまく組み込まれていてとても使いやすく感じた。とにかく快適な生活だった。

すでに30年が経ち、日本の住宅事情も変わり何かは良くなった。しかし住まいやまちの環境も、課題は山積みだ。時間という観点を含めて本当の意味の豊かさをみなで考えていかなければならない。やることはたくさんあり、住まいづくりもまちづくりもまだこれからだと思っている。

(株式会社後藤真理子デザイン事務所代表 後藤真理子)



アネルセン：ワンルームマンション(2006年竣工)

Fact Sheet

後藤 真理子

— 建築からまちへ ②

女性の発言と役割 — まちへの視点も忘れずに

冒頭(建築からまちへ①)の社長さんの話にもどって考えてみたい。

建築物はものの一つだが、人が入って利用するからサイズ的にはかなり大きいものだ。住宅はビルなどに比べれば小さいが、それでもたくさんの複雑な機能がある。設計者は住む人の生活をイメージしながら考え最後に一つの案が決まる。しかしでき上がって使い手に渡った時、つくり手の意図が必ずしも使い手の意向に沿っていないこともある。ものをつくる立場にいる人はどんな分野でもこのような経験があるだろう。ものをつくるのはこのように矛盾をかかえた難しい仕事である。

2012年の今、つくり手としての女性の割合は以前より増えた。また男性、なかでも若い世代の男性が使い手になる機会も増えている。しかし実際の生活の場で女性が使い手である機会はまだまだ多い。社長さんが言うように、ただし「ほとんどのもの」ではないにしても「男性が手がけて、使うのは女性」という構図はこれからも続きそうである。このように考えると、女性、とくに若い世代の女性に対して期待したいことがある。使う側からみた前向きの発言である。見えにくい問題に気づくのはむずかしい。しかしでき上がったものを手にして「おやっ」と思った時、なにが気になったのかをちょっと立ち止まって考える。専門家が、信頼あるメーカーがつくったのだからちゃんできているのが当然とそのまま受け入れるのではなく、問題点に気づき指摘できる目を養ってもらいたい。

最後にもう一つ。まちの環境やありかたにも目を向けるということ。まちを都市と言いかえてもいい。いろいろな建築物がどのように建てられているか、乱雑に見えないか、道路は、車で人が追いやられていないかなど身近なことを含めて注意深く観察してほしい。まちづくりも広い意味でもものをつくることであり、まちづくりの専門家は建築と比べて比較にならないほど複雑で困難な問題に取り組んでいる。私たちはまちへの視点を忘れず、誰かがつくったのだから

仕方ないとあきらめず、使い手としてどう受けとめるかを積極的に意識し、時には発言する。これは女性ならではの役割だとも思う。

(裏面に続く)



Lei 'OHANA:住居とレンタルスペースが共存するギャラリーハウス(2002年竣工)

Fact Sheet

後藤 真理子

—— 建築からまちへ ②

略歴

年代	
1948年	東京都大田区に生まれる
1967年	東京都立三田高等学校卒業
1972年	東京工業大学工学部建築学科卒業
1972 - 76年	東京工業大学篠原研究室 研究生として建築設計に携わる この間「谷川俊太郎さんの住宅」(群馬県吾妻郡)の設計監理に従事
1975年	ロンドン・パリを中心にヨーロッパの都市・建築を視察
1976年	後藤真理子デザインアトリエ設立
1978年	ローマ在住。この間、イタリアでの生活を通して都市や住宅を視察
1982年	帰国後、株式会社現代設計研究所設立
1988年	株式会社後藤真理子デザイン事務所に改称
1995 - 00年	日本建築専門学校講師
1996 - 01年	明治大学講師
1998 - 07年	神奈川大学講師
2007年 -	横浜国立大学講師

(株式会社後藤真理子デザイン事務所代表 後藤真理子)

建築と歩む —— チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ